



# 向野遺跡発掘調査報告書

平成9年度

倉吉市教育委員会

## 序

この報告書は、平成9年度に鳥取県立倉吉農業高等学校女子寮新築整備事業に伴う発掘調査として、倉吉市大谷字向野において実施した埋蔵文化財の調査の記録であります。

鳥取県の中央部に位置する倉吉市は、豊かな自然と風土の中で育まれた、数多くの優れた文化財を今日に伝えています。

今回の調査地に隣接する南の丘陵一帯には、伯耆国衙や国分寺・国分尼寺が置かれ、奈良～平安時代の政治・経済・文化の中心的役割を担っていました。史跡として活用を図るため、これら3遺跡を一体化した環境整備事業が進められているところです。

この度の調査では、国衙の営まれていた時期の集落と溝状造構を検出しました。国衙周辺の居住地の様相を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財愛護の理解・普及に、あるいは教育・研究の一資料としてお役に立てば幸いに存します。

最後に、調査にご協力いただいた倉吉農業高等学校の皆様をはじめ、関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

平成10年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足 羽 一 昭

<10>0100572775

## 例　　言

1 本報告書は、平成9年度に倉吉市教育委員会が、鳥取県立倉吉農業高等学校女子寮新築整備事業に伴う事前調査として、倉吉市大谷字向野において実施した発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勅（倉吉市文化財保護審議会会長）

手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調査員 根鈴 輝雄（倉吉博物館学芸員） 滝田 康幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下 哲哉（文化財係主任） 根鈴智津子（文化財係主事）

加藤 誠司（文化財係主事） 囗本 智則（文化財係主事）

岡平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

事務局 石田佐喜子（教育次長 9月まで） 新田 征男（教育次長 10月から）

生田 淳美（文化課課長） 福澤 昌子（文化財係主事）

山崎慎之介（文化財係主事） 金田 朋子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・竹歳 晚子・山崎有香子

3 現場での調査は、根鈴智・岡平が担当し森下・山根が補佐した。遺構の写真撮影は根鈴智・岡平が行った。

4 遺構の図面整理は根鈴智・松田・世浪・妻藤、遺物の実測および観察は根鈴智・岡平・山根、写真撮影は岡平が行い、松嶋・竹歳・山崎が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が行った。

5 遺構測量のための基準杭設置を鵬技術コンサルタント株式会社に委託した。

6 予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

7 本書の執筆は、調査員が討議し根鈴智・岡平が行い、文末あるいは表末に記した。編集は松田・世浪が担当した。

8 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

9 掘団中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

10 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

11 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

## 本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	2
1	遺構	4
2	遺物	14
IV	まとめ	21
報告書抄録		

## 挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	2
第2図	向野遺跡調査区位置図	3
第3図	向野遺跡遺構全体図	4
第4図	瓦窯関連施設遺構図	5
第5図	溝状遺構断面図・変遷図	6
第6図	溝状遺構遺構図・1号土壤平面図	7
第7図	造成段平面図	11
第8図	1号・2号住居遺構図	12
第9図	3号・4号住居遺構図	13
第10図	1号・2号住居状遺構遺構図	14
第11図	1号～3号落し穴遺構図	15
第12図	瓦窯関連施設出土遺物図	15
第13図	溝状遺構・造成段出土遺物図	17
第14図	竪穴式住居・住居状遺構・ピット出土遺物図	19
第15図	鉄製品・石器出土物図	21

## 図版目次

図版1	遺跡・遺構 調査区・瓦窯関連施設
図版2	遺構 1号溝状遺構
図版3	遺構 1号溝状遺構
図版4	遺構 1号～5号溝状遺構
図版5	遺構 竪穴式住居・住居状遺構
図版6	遺構 全景・落し穴
図版7	遺物 瓦窯関連施設・溝状遺構・造成段・遺構外出土遺物
図版8	遺物 竪穴式住居出土遺物

## I 発掘調査に至る経過

平成8年10月、鳥取県教育委員会総務課から、鳥取県立倉吉農業高等学校女子寮新築整備事業に伴う予備調査が、倉吉市教育委員会に依頼された。女子寮が整備される農業高校校地は、周辺に伯耆国衙をはじめ多数の埋蔵文化財が存在している地域にあることから、倉吉市教育委員会は国・県の補助を受け平成9年1月にトレンチによる予備調査を行った。その結果、上層は校地造成による擾乱を受けていたものの、底面に焼土面を伴う溝状遺構を検出し、遺跡が存在することが明らかになった。女子寮の建設位置等について県教育委員会と協議した結果、女子寮は計画通りの位置に建設されることとなり、倉吉市教育委員会が主体となり事前の発掘調査を行った。計画範囲は調査前には樹木園として利用されており、数本の木の移植が必要となったため、平成9年4月11日から調査員の立会の元に移植作業を行い、調査は4月24日から6月24日まで行った。調査面積468m<sup>2</sup>。 (岡平)

註 同本智則 「大谷向野地区(向野遺跡)」『倉吉市内遺跡分布調査報告書』 倉吉市教育委員会 1997

## II 位置と歴史的環境

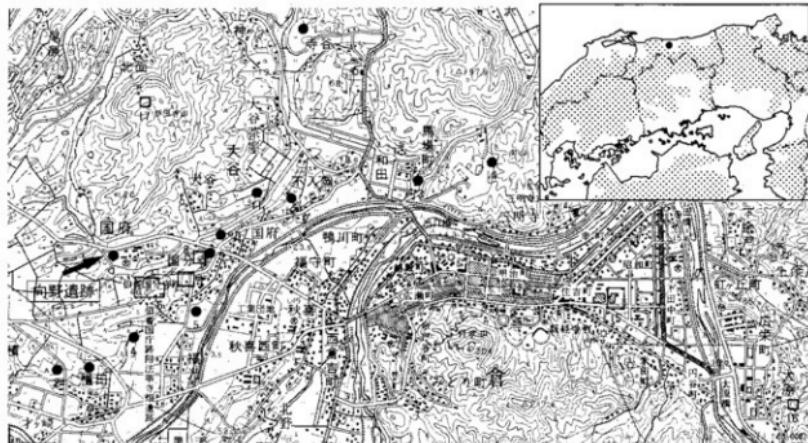
向野遺跡は、倉吉市街地の西郊4km、倉吉市大谷字向野に所在する。大山の火山灰によって形成されたゆるやかな起伏をもって東へ延びる通称久米ヶ原丘陵上に位置する。久米ヶ原丘陵の東端は東西に細長い谷があり組み、丘陵が分岐して終わる。当遺跡は、南北をその細長い谷に挟まれた標高40mの舌状を呈した丘陵の北緩斜面にあたる。北には谷を挟んで四王寺山がそびえ、南には谷を挟んで伯耆国衙の造営された丘陵がある。調査地から伯耆国衙跡北西隅部まで直線距離にして300mと非常に近接した位置である。丘陵一帯の小字は「向野」であるが調査地から南側の一部分に「沓掛」の小字が残っている。<sup>(11)</sup>『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』によると、倉光清六氏の調査した大谷字向野付近の台地上には表面下約40cmの土壤間に土器・石器類を含み特に土器の破片は豊富であるとあり、図版には弥生土器底部、土師器高环、手捏ね土器、把手、磨製石斧が報告されている。

周辺には多くの遺跡が分布するが、主に奈良～平安時代の遺跡を取り上げる。まず、伯耆国衙(6)に隣接して同一丘陵上には、国分寺(7)・国分尼寺(法華寺)遺跡(8)、さらに伯耆国の物資収納施設と推定される不入岡遺跡(12)が連なっている。このあたりは当時の政治・経済・文化の中心地であった。この時代の集落は点在しており、中峯遺跡・福田寺遺跡2次(2)・矢戸遺跡(3)・鳴ノ掛遺跡(4)・櫛塚遺跡(10)・中尾遺跡(11)・西前遺跡(1)・西山遺跡・平ル林遺跡(13)などが知られている。中には大型掘立柱建物や硯の出土から官衙関連要素のうかがわれるものもあるが確定に至っていない。古代寺院としては、大御堂庵寺(15)・大原庵寺(16)・石塚庵寺・藤井谷庵寺がある。道路遺構としては、伯耆国衙・大日寺遺跡群での調査がある。墳墓はほとんどわかっていないが、長谷遺跡(14)で土師器の骨蔵器2個を石棺内に合葬した火葬墓が見つかっている。平安時代には、四王寺山頂に四天王像を安置し修法を行った四王寺(17)が建立された。

遺跡として調査はなされていないが施釉棟瓦についてみると、近年まで四王寺山山麓は、良質の粘土を利用して施釉棟瓦の瓦窯が築かれ、野田・大谷・大谷茶屋・尾原・上神に分布していたといわれる。島根県石見地方から職人を伴って幕末～明治時代には技術伝播したとみられるが、瓦窯跡について詳しいことは記録にはない。

なお、調査地は県立倉吉農業高等学校校地内にあり、学校の概要を簡単に記しておくと、公立久米河村農学校として倉吉町東町大岳院内に設立した。開校と同時に大谷村原野六町五反歩が開墾され、明治20年現在地へ校舎が新築移転された。校地内で発掘調査を事前に実施するようになったのは近年のこと、遺構の確認は今回が初めてである。

(根幹智)



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1 西前遺跡	6 伯耆国衙跡	11 中尾遺跡	16 大原庵寺跡
2 福田寺遺跡（2次）	7 伯耆国分寺跡	12 不入間遺跡	17 四王寺跡
3 矢戸遺跡	8 伯耆國分尼寺跡（法華寺畠遺跡）	13 平ル林遺跡	
4 鳩ノ掛遺跡	9 宮ノ下遺跡	14 長谷遺跡	
5 河原毛田遺跡	10 摺塚遺跡	15 大御堂庵寺跡	

註

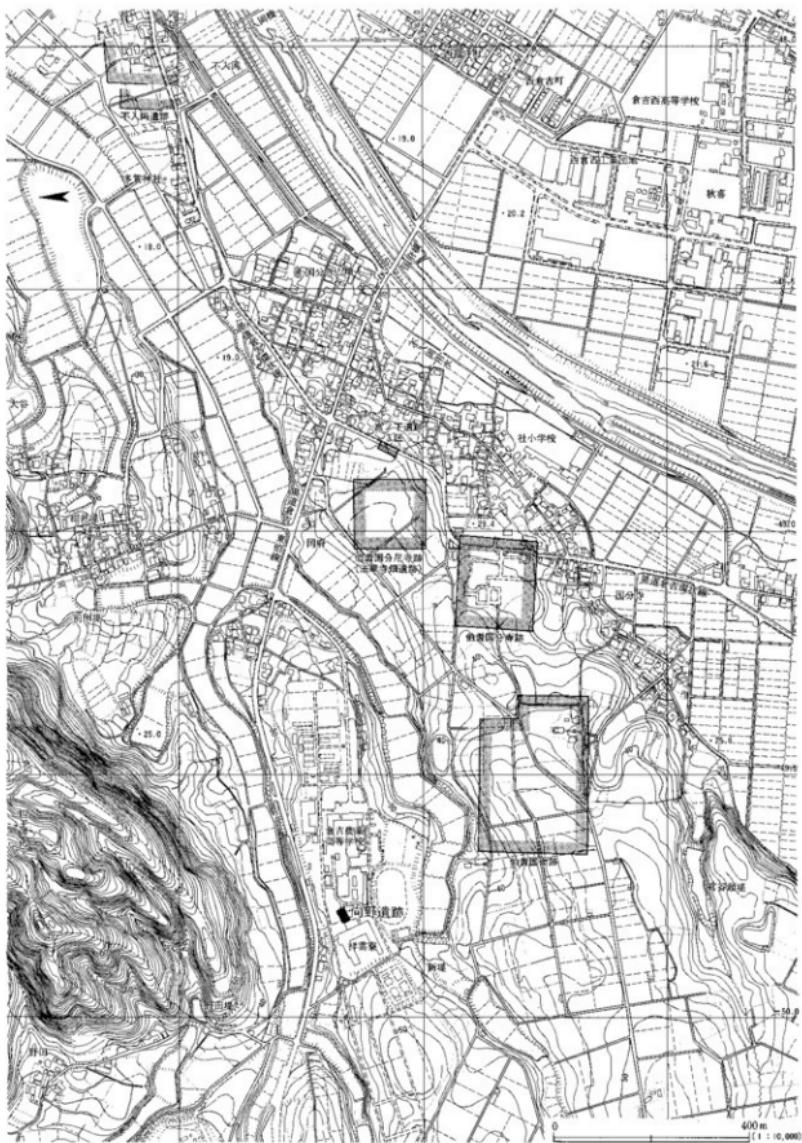
- 1 梅原末治 「鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡」『鳥取縣史續勝地調査報告 第一冊』 1922  
 2 有福友好 「教育 倉吉農業高等学校』『倉吉市史』 1973

### III 調査の概要

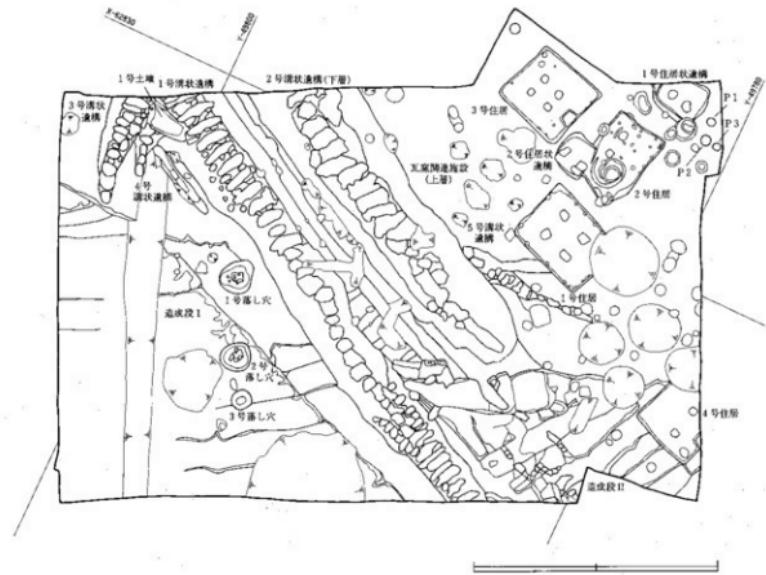
調査区の層序は上から I' 棚地に伴う盛り土、I 黒褐色土（クロボク）、II 褐色土（漸移層）、III 淡褐色粘質土（ソフローム）、IV 淡青灰色砂質土（上のホーキー）、V 灰褐色砂質土（オドリ火碎流）、VI 淡青灰色砂質土（下のホーキー）、VII 黄褐色砂質土（A T 火山灰）、VIII 橙褐色粘質土（礫混じり粘質土）である。

調査区北部の住居を検出した辺りは、他よりも高く自然地形を留め、I ~ III層を残しているので遺構検出面は II 層上面である。それ以外の地区では、後述するが溝状遺構に伴う古代の造成が IV ~ VI 層まで及んでいたため、遺構検出面は IV 層以下である。各遺構は黒褐色土で覆われた上に、近代の棟地開墾による盛り土や掘削（搅乱）を全域に被り、特に調査区南隅部は古代の造成土面が削平されてしまっていた。

調査の結果、近代瓦窯関連施設 1 基、平安時代溝状遺構 5 条・竪穴式住居 4 棟・住居状遺構 2 棟、縄文時代落し穴 3 基などが検出された。



第2図 向野遺跡調査区位置図



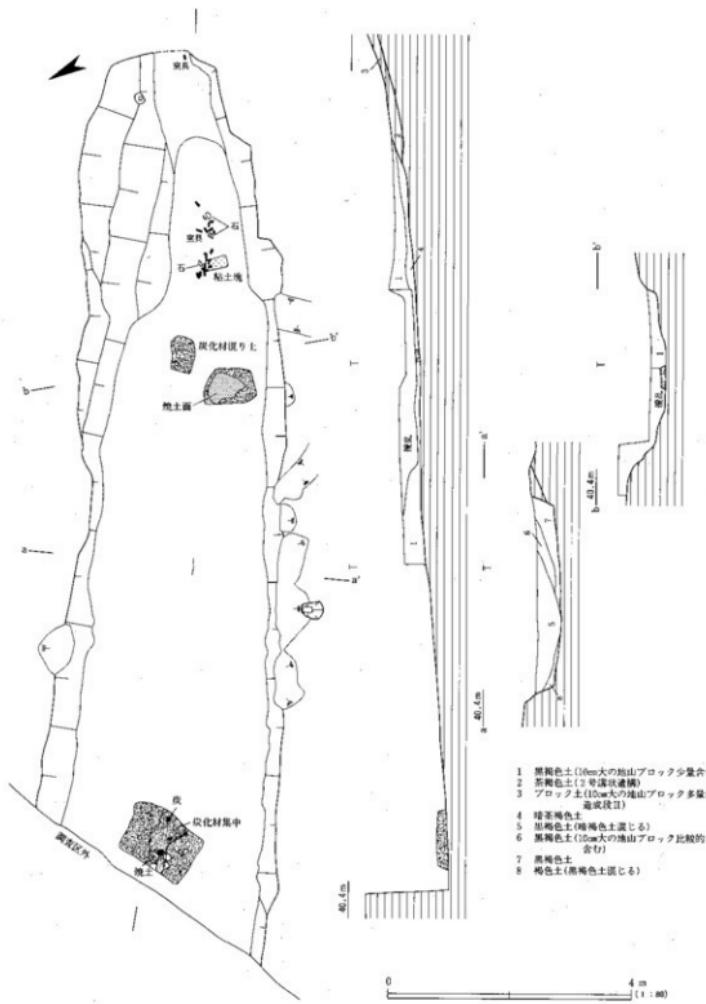
第3図 向野遺跡遺構全体図

1 遺構

瓦窯関連施設 調査区中央部に位置する溝状の造構で、北西から南東方向へ丘陵の傾斜に沿ってゆるやかに上昇し、南東側ではぼって終わっている。検出長15m、北西側の基部で最大幅約4m、検出面からの深さ約0.6mを測る。横断面はU字状で底面は広く平坦である。主軸方向はN-121°-Eで、基部と先端部底面では比高差0.95mを測り、傾斜角約4°となる。振り方は黒褐色土から切り込まれ、埋土はほとんどが地山(ホーキ層)ブロックを含んだ黒褐色土と擾乱土であった。

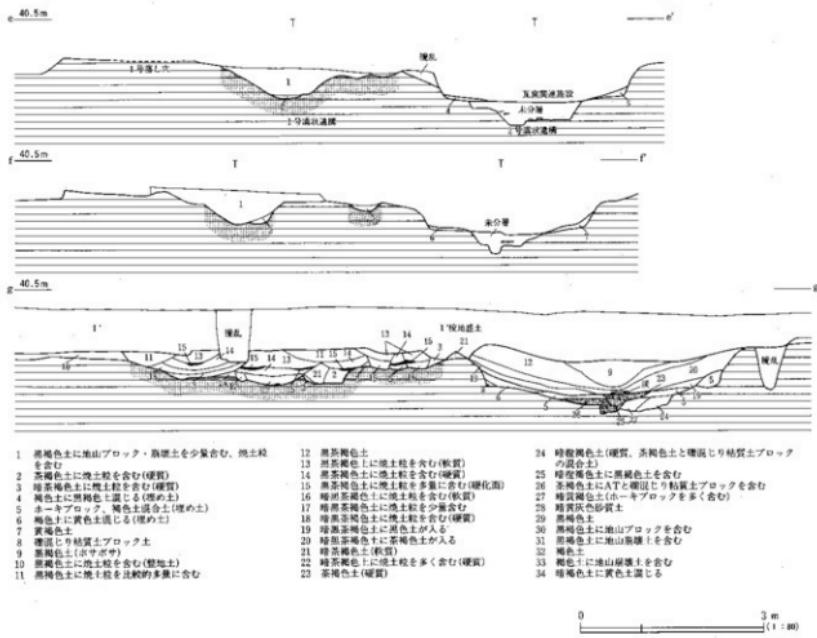
基部底面では直径1.0mの範囲に炭化材と焼土が厚さ20cm程堆積し、南東約7.5m離れた先端部側でも直径0.6mの範囲に炭化材小片と焼土面が認められた。この焼土面の南東1m辺りで溝の底面は幅1.3mにせばまり、底面には窯具多数と焼石、粘土塊が面的にまとまって出土した。窯具はモミ土とよばれる瓦用の幅3cmの角棒状のもので、瓦を押しあてた跡みが斜めにつく。モミ土は製品としての瓦を生かすため瓦から離す時には叩き割られるものであるから、このようなモミ土の出土状況が窯内の状況を示しているとは断定しがたい。焼土面は火を焚いた地点を示すものではあるがその用途は不明であり、モミ土は一括廃棄状態としておく。

一般に、施釉棧瓦の焼成施設は連房式登窯あるいはダルマ窯とされている。溝の壁両面とも被熱状態はみられず、窯天井部構築及び破壊の痕跡、また先端部に煙出し部の痕跡も認められなかったので、瓦窯関連施設として報告するが再考を要する。瓦窯関連施設は、底面下層に2号溝状遺構があり、埋没後の凹みを利用したものと考えられる。



第4図 瓦窯関連施設遺構図

出土遺物は、五輪塔空風輪1個、現代陶磁器類、施釉棧瓦・焼瓦があるが、ほとんど擾乱土中のものと考えられる。窯に関するものとしては、瓦用窯具角棒状（モミ土）43個、釘状（ハセ）4個、陶器用窯具焼き台1個、窯壁を構築する煉瓦（トンバリ）2個が出土している。

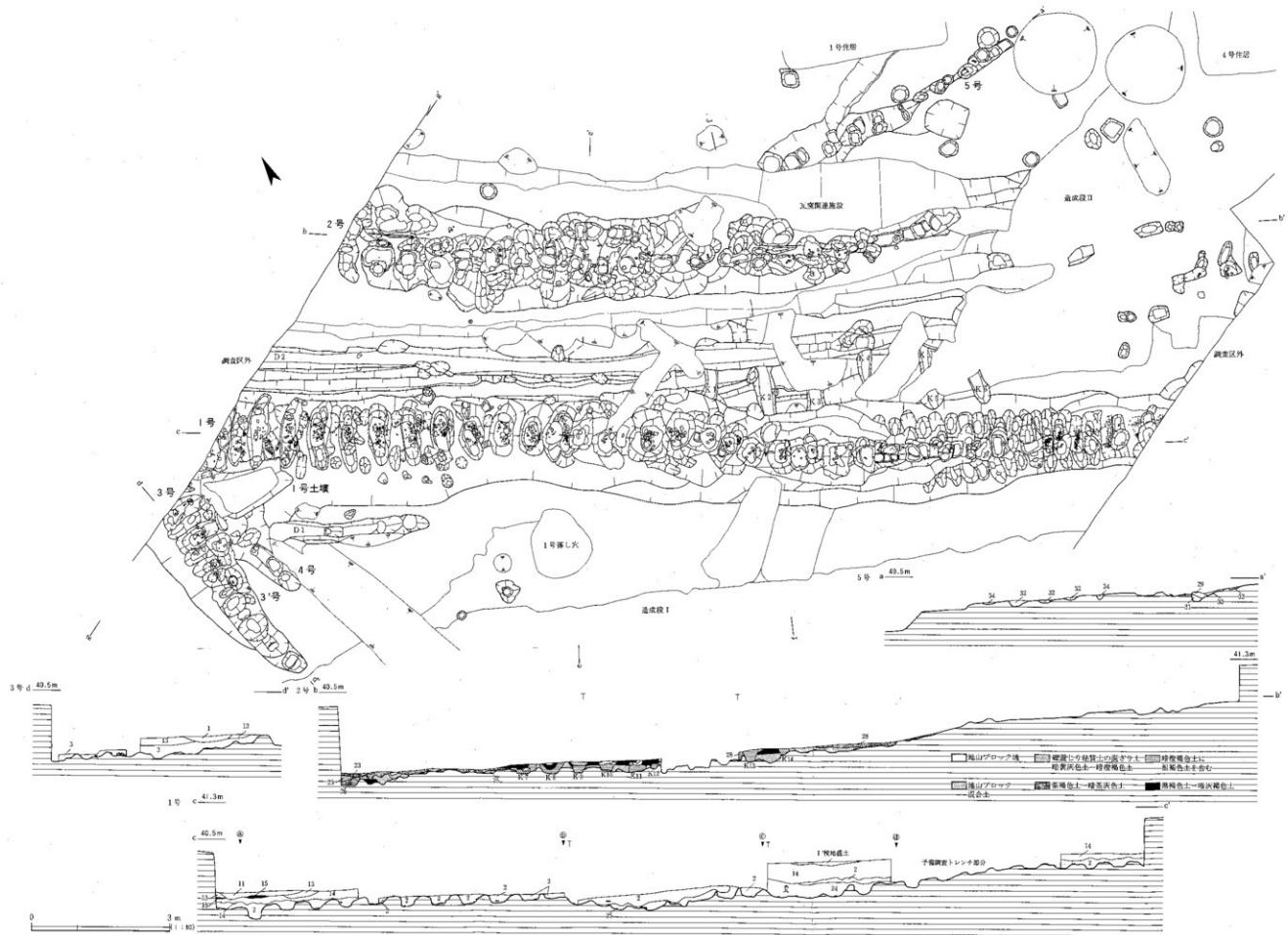


第5図 溝状造構断面図・変遷図

1号溝状遺構 調査区中央部を北西から南東方向へ斜行する溝状の造構で調査区外にも及ぶ。検出長21m、溝幅は北西部（斜面下方）2.4m・南東部（斜面上方）1.5mを測り、上方へ行くに従って狭くなっている。溝底には楕円形の土壤がおよそ心々距離60cm間隔で連なり、土壤の長径もまた斜面上方は小さくなっている。主軸方向はおよそN-63°-Wで、両端の比高差は1.1mを測り、傾斜角約3°とゆるやかである。

検出面はIV-VIホーキ層であるが、溝内のホーキ層全面が熱を被り、特に土壌壁面は赤化が著しかった。地山自体が熱によって滑らかな硬化面として検出されたので、わずかな回みも認識することができた。土壤底面は重複し、配置・切り合ひ関係から少なくとも6回以上の掘り直しが推定される。

土壤の規模・形状・埋土を3箇所に分けてみると、斜面下方（縦断面の起点cから図中①まで）と斜面上方（④から終点c'まで）はホーキ層を地山とし、それぞれ長径1.2~1.6m・短径0.3~0.4mの長楕円形、長径0.4~0.5m・短径0.3~0.4mの楕円形である。それに對して中間（⑤⑥間）はホーキ層よりさらに深い凹凸混じり粘質土層に土壌底を設け、長径0.5~0.8m・短径0.4~0.5mの不整円形ないし方形と違がある。また、ここで被熱面は疊混じり粘質土層には認められなかったので、焼成はホーキ層に伴うものと考えることができる。中間（⑤⑥）



第6図 溝状造構造構図・1号土壤平面図

間) では土壤列が乱れ、中程の⑤点辺りで一旦、溝の幅が狭まり土壤の深さも浅くなっている。掘削の単位とみることができ。土壤埋土は中間(⑥④間)の下層のみ礫混じり粘質土に由来する暗橙褐色土(25層)があり、その上を全体に茶褐色土(2層)がある。ともに固くよく締まった均質な土であり、土壤内に旧表土の自然流入の痕跡はみられなかった。土壤埋土の遺物については図化しながら調査を行ったが、同一個体の土器片が広範囲に散在していることがわかった。これらのことから、土壤は人為的な埋め戻しと判断される。土壤内には、瓦と土器の細片、礫がいわば砂利状態で含まれ、火を受けているものが多くみられた。埋土中には焼土粒が含まれてはいたが、被熱面が広いのにもかかわらず炭化物や焼土塊の目立つものは無かった。中間(⑥④間)の礫は他よりも大きめの20cm大のものが多い。斜面上方(⑥c'間)では、土壤と土壤の間の部分に2~3cm大の土器片と小礫が散かれてホーキ層面に密着し、しかも磨耗しているものもみられた。このことは斜面上方では敷面が長らく地表に露出していたことをあらわしている。

縦断面観察では、土壤埋土である茶褐色土の上面は不自然な凹凸をなし、そこに強い硬化面が認められた。溝検出面から茶褐色土上面までの深さは斜面下方で約30cm、斜面上方で約10cmと浅く、斜面上方は先端部に近いと思われる。尚、断面では茶褐色土内に掘り直しの痕跡は確認できなかったが、土壤底面の重複は掘削の都度に焼成をも繰り返し行われたことを示し、平面面の不一致に問題を残している。溝埋土は黒褐色土で、旧表土に由来する自然堆積土と考えられる。調査区北壁(R8g')及び縦断面④付近では、土壤検出面よりかなり上層で硬化部分が5箇所明瞭褐色土として認められた(15層)。同レベルにあるので一連の硬化面とみることも可能である。

出土遺物には瓦・須恵器・土器・鉄釘・銅錠があり、いずれも細片で磨滅し、極めて少量である。礫と瓦・土器は混在し使われ方に差はなかった。瓦は26片、内10cmを超えるものは2片のみで、小さいものは2cm大であった。軒平瓦は1片(図版7右上)である。土器は、須恵器では蓋・壺・皿・転用硯(高台付皿・朱墨)・平瓶・壺・甕・円面硯、灰釉陶器蓋・土器では蓋・壺・皿・甕・土製支脚があり、あらゆる器種を含んでいた。個体数の多いのは須恵器大甕、次いで土器器甕である。出土量の少ない中で、同一個体の破片が広範囲に点在して確認され、特に掘削の違いのみられた中間(⑥④間)の土壤埋土の破片が、斜面上・下方の土壤でも出土している点を積極的に捉えるならば、掘削の深さに違いはあるものの埋め戻しは同時になされたとみることができる。須恵器大甕の中には外面平行叩き目文で内面菊花状当具底のもの4個体分、外面格子叩き目文で内面粗いハケメの岡山勝間田焼系のもの1片もある(図版7右下)。溝検出面では五輪塔空風輪1個が出土している。

付随施設として、1号・2号溝状造構間に方向を同じくして幅0.4mの深い溝がある。溝底は被熱により硬化面をなし、4条以上の重複が認められた(D2)。1号溝状造構の南側には短いながら同様の溝(D1)があり、2号溝状造構北側には認められなかったので、一応、1号溝状造構に伴う側溝と考えておく。側溝間の心々距離は3.6mを測る。埋土は固く締めた茶褐色土で、僅かに土器片・礫が出土している。溝状造構よりも側溝の方がむしろ高位にあり、排水設備というよりは区画を意図するものであった可能性がある。また、1号溝状造構と側溝D2の間に幅0.4m・深さ2~10cmの土壤(K1~6)がおよそ1.2m間隔に6基連なっていた。K1~6の埋土は黒褐色土で遺物は出土しなかった。1号溝状造構と側溝D2に切られていることを重視すれば、溝状造構と同様の古段階の造構とみることもできる。K1~6列の延長上にあたる南東側は、後述する造成段IIにより削平されているが、ホーキ層に設けられた土壤の被熱面が所々に残っている。これらと元々一連のものであった可能性もある。

**2号溝状造構** 調査区中央部、1号溝状造構の北側を平行してのびる溝状造構で、瓦窯関連施設の下層で検出した。溝底には土壤が疊り複雑に重複している。わかりやすいところで推定すれば、心々距離60~70cm間隔で掘られたものと推定される。土壤列の先端部は東へ徐々に湾曲し、検出長13.5m、主軸方向はおよそN-58°-W

で、両端の比高差は1.3m、傾斜角は約4°で、先端部になると9°に変化する。

土壤列の検出面及び地山は礫混じり粘質土層である。土壤の規模・形状は、長径0.4m・短径0.4mの不整円形～方形を呈し、1号溝状遺構の中間（⑤⑥潤）に似ているが、埋土は多種類あり非常に硬質であった。埋土中には、20cm大の礫が比較的多く、小礫も部分的にみられた。縦断面では土壤の構成状況が観察された。特に中央部K 7～14では、地山掘削後に下層を暗灰褐色土～暗橙褐色土、上層を黒褐色土～暗灰褐色土で埋め戻し、新たに60cm間隔で土壤を掘削している。そして、土壤内は黒褐色土を含む暗橙褐色土で埋め、K 7～12はその上層に地山ブロックそのもの（ホーキ層・AT層・礫混じり粘質土層）あるいは地山ブロック土で充填している。さらにその上を溝の中央部全体に均質な茶褐色土が認められた。地山自体は硬化していなかった。

土壤埋土の遺物は固化しながら調査を行ったが、1号溝状遺構に比べると遺物量は非常に少ない。瓦も1片（15cm大）で瓦窯関連施設出土のもの2片を含めても僅か3片であった。土器は、須恵器では壺・転用観（高台付皿・朱墨）、甕等があり、小型平瓶（16）と円面鏡（20）は1号溝状遺構と同一個体破片である。土師器では、壺・皿・甕等がある。量的に多いのは須恵器大甕・土師器甕である。

**3号溝状遺構** 調査区東隅部に位置し、北から南へ上昇して終わる溝状の遺構で、検出長4.5m・溝幅は斜面下方で最大幅約1.6mを測る。接点は調査区外であるが1号溝状遺構から分岐したものと考えられる。溝底には、斜面上方へ長径を減じながら梢円形～円形の土壤が連なる。土壤の重複の関係から、少なくとも3回以上の掘り直しがあり、心々距離60～80cm間隔で掘られたものと推定される。主軸方向は東へ徐々に湾曲しているが、およそN-E～Wで、基部と先端部との比高差は0.5mを測り、傾斜角5°となる。

調査区北壁断面の観察では、地山（ホーキ層）に積まれた整地土（焼土粒を多く含む黒褐色土）の上から掘り込まれ1号溝状遺構を切っている。基部は、1号土壤の西半分を埋めて構築していた。1号溝状遺構と同様、溝内のホーキ層全面が熱を被り、溝底の土壤は赤化していた。土壤埋土は下層に固く良く締まった茶褐色土、上層に黒褐色土があり、瓦3片の他、土器・礫が少量出土した。瓦は二次焼成を受け、磨滅している。須恵器の中には1号溝状遺構出土破片と同一個体の壺（21）、小型甕・大型甕の破片がみられる。

**4号溝状遺構** 調査区東隅部、1号・3号溝状遺構間に位置する溝状の遺構で、1号溝状遺構の側溝（D 1）を切り、1号土壤と3号溝状遺構に破壊されている。検出長2.2m、溝幅は斜面下方で最大幅約1.0mを測り、溝底には土壤が連なる。主軸方向はN-E～Wで、基部と先端部との比高差は0.5mを測り、傾斜角11°と他に比して急である。溝内のホーキ層全面が熱を被り、土壤は赤化していた。土壤埋土は固く良く締まった茶褐色土で、土器・礫が僅かに出土した。

**5号溝状遺構** 調査区北側に位置し、西から東へ上昇して終わる土壤列で、中程は浅い溝状をなす。検出長6.0m・溝幅は斜面下方で最大幅約1.0mを測る。接点は瓦窯関連施設に破壊されているが、2号溝状遺構から分岐したものと考えられる。土壤は直径0.3～0.4mと小規模である。土壤の重複の関係から少なくとも3回以上の掘り直しがあり、心々距離60cm間隔で掘られたものと推定される。主軸方向は北へ徐々に湾曲しているが、およそN-E～Eで、基部と先端部との比高差は0.4mを測り、傾斜角4°となる。土壤は赤化し、埋土は黒褐色土で、土器・礫が少量出土した。須恵器中には、1号溝状遺構・3号住居下層出土破片と同一個体と推定される大型甕の破片がある。

**1号土壤** 調査区東隅部、1号・3号溝状遺構との間の基部に位置する。規模は長軸1.6m・短軸0.6～1.0m、検出面からの深さは南側で48cmを測る。底面は礫混じり粘質土層中に設け、平坦である。埋土は暗褐色土の單一層で、遺物はわずかに土器片が出土した。1号・3号溝状遺構に共存する施設と推定されるが、用途は不明である。元々の形状は、側辺が弧状をなす長軸2.5mの長方形の土壤である。4号溝状遺構を切って造られるが、1号

溝状造構の土壘列を破壊していない。3号溝状造構を構築する際には、土壤西半分を地山ブロック混入土で埋め立てて規模を縮小している。1号土壘周辺の前後関係は第5図のようになる。

**造成段I** 1号溝状造構の南側一帯は、IV～VIホーキ層が掘削され、図中P Qから南は10cm大のホーキブロック土の整地土で埋め戻されていた。整地土の厚さは調査区西壁断面では40cmである。掘削の段は、南東部（図中P）では1号溝状造構上縁と1.3mの距離があり、北西部へ間隔を広げながら直線的に続き、3号溝状造構付近（図中R）で屈折する。3号・4号溝状造構の位置をふまえての掘削と推定される。掘削段差は20～25cmである。

掘削面には工具痕を明瞭に残していた。現代のスコップ様の使い方で縱に踏み込んだ状況がみられた。注目されるのは、約1.2mごとに平行線状に高い部分一稜線が認められる点である。3号溝状造構と1号落し穴の間にに入る稜線（図中R）は1号住居南辺（図中S）まで達し、また3号落し穴上に入る稜線（図中T）は1号・2号溝状造構の間を通って4号住居西辺（図中U）に達する。このように広範囲に及ぶ掘削面の平行線の方向は、丘陵の旧地形をあらわしているものと推定され、造成段Iは溝状造構を掘削する際に行われたものと考えられる。

**造成段II** 造成段Iの方向と異なる同様の造成段が4号住居南側から1号溝状造構の間にある。造成段の平行線は1号・2号溝状造構に対して直交する方向性をもち、1号溝状造構を残して掘削しているようにみえるが、1号溝状造構の側溝を削平している。2号溝状造構の南東延長部には被熱により赤化した土壤が部分的に残っており、もともとは1号溝状造構と同様の、南東方向に伸びる別の溝状造構があった可能性がある。

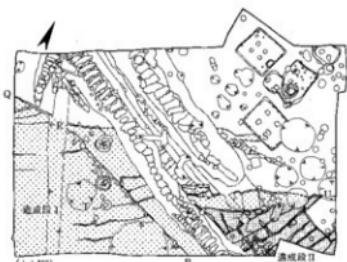
#### 竪穴式住居・住居状造構

竪穴式住居は調査区北部、2号溝状造構より北側で4棟検出した。いずれも小型の住居で近接して並び建ち、主軸方向は1号ないし2号溝状造構に揃う。共通する構造上の特徴としては、中央ピット・壁際中央特殊ピット、また周壁溝をもたないこと、主柱穴の掘り方は方形であるが柱は丸材であること、出土遺物は須恵器が数片しかないので対し赤色顔料塗彩の土師器の個体数が多いこと、があげられる。

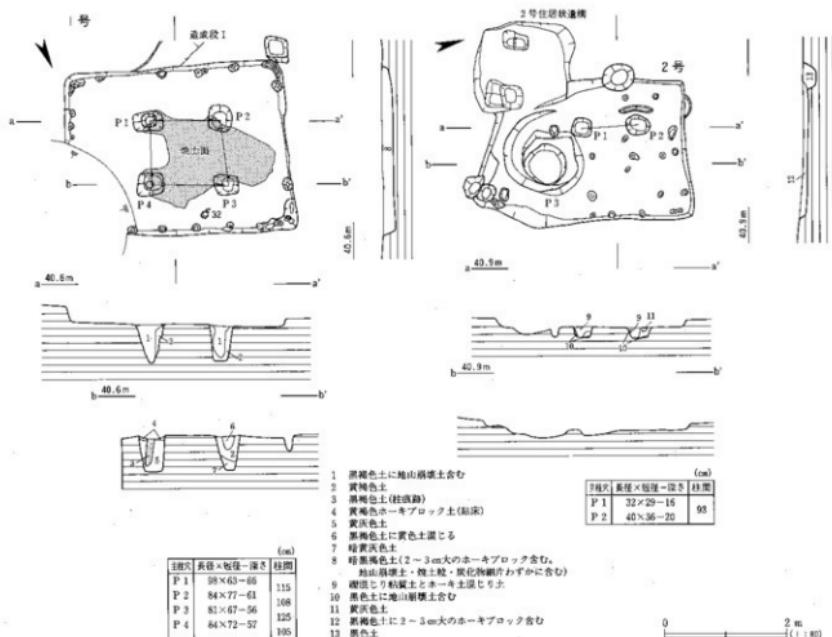
住居状造構は調査区北隅部で2棟検出した。主柱穴を備えているが、床面積は住居の1/3程度でしかない。以下、各造構について記す。

**1号住居** 2号溝状造構の北側に位置し、その間に5号溝状造構がある。造構検出面はIII上のホーキ層上面である。平面形は北辺を下底辺とする東西に長い台形状を呈し、床面の規模は南北2.6m・南辺3.3m・北辺3.6m（推定）で、床面積約9.0m<sup>2</sup>を測る。最大壁高は34cmである。短軸方向はN-21°-Eで、西辺と2号住居西辺は通りが接している。主柱はP 1～4の4本で、柱間は比較的広い。柱振り方は方形でP 4の柱痕跡は直径12cmであった。周壁には小ピットが深さ6～35cmと不揃いながら規則的にめぐっている。床面中央の広い範囲に焼土面が認められたが、炭化物・焼土は検出されなかった。

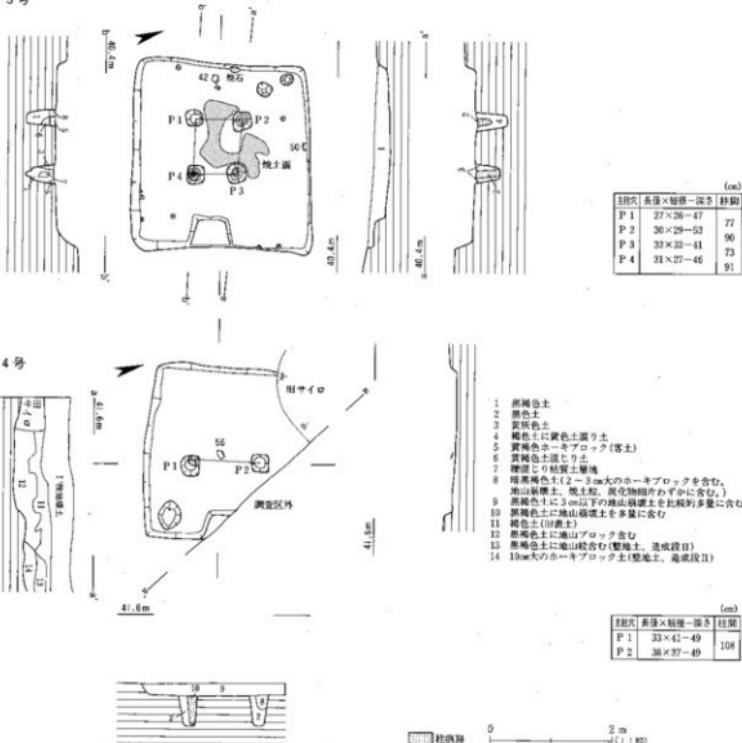
主な遺物としては覆土から鉄斧（F 2）、P 4から不明鉄製品（F 3）、床面から土師器皿（32）が出土している。またこの住居のみ瓦片2片が出土し、内1片は繩目叩きの7×13cm大の平瓦でもう1片は細片である。ともに焼土が付着し二次焼成を受けている。



第7図 造成段平面図



3号

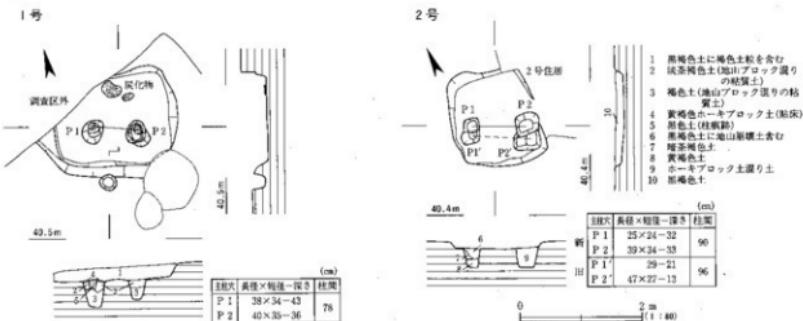


第9図 3号・4号住居遺構図

**4号住居** 調査区東隅部に位置する。2号溝状遺構を削平後、埋め戻した当時の整地層の上面（第9図13層）から掘り込んでいる。4号住居南側に残る造成の段の方向に住居が構築されている。平面形は隅部がそれぞれ攢乱と調査区外にかかるが、主柱穴及び東辺壁際の方形壇の位置関係から、東西に長い方形を呈するものと推定される。床面の規模は東西長2.7m、南北長2.6m（推定）で、床面積約7.0m<sup>2</sup>と推測される。最大壁高は30cm、短軸方向はN-18°-Eである。主柱はP 1・2の2本で、東寄りに位置し柱間は広い。柱掘り方は方形でP 1の柱痕跡は直径18cmである。東辺壁際中央に縦48cm-高さ14cmの台形に掘り残した方形壇（上のホーキ層）を有す。

主な遺物としては、埋土から不明鉄製品（F 4）、床面から土師器皿（56）が出土している。

**1号住居状遺構** 調査区北隅部に位置する。遺構検出面はII褐色土上面である。北西隅部は調査区外にかかるが、平面形は東西に長い歪な長方形を呈すと推定される。床面の規模は東西長1.9m・南北長1.3mで、床面積2.5m<sup>2</sup>を測る。最大壁高は26cmである。短軸方向はおよそN-12°-Eで、2号住居と中軸がほぼ同一ライン上にある。主柱はP 1・P 2の2本で、やや南寄りにあり、柱掘り方は円形で柱痕跡は直径12cmである。床面北側には炭化材が5cmの厚さで出土した。焼土および被熱痕跡は認められず、出土遺物も少ないと建築部材というよりは



第10図 1号・2号住居状造構造構図

薪材と推定される。

覆土から赤色顔料塗彩の土師器高环片、高台付环片・手捏ね成形皿片が出土したが固化できなかった。

**2号住居状造構** 2号住居の南西隅部に位置する。造構検出面はII褐色土上面である。平面形は南辺を底辺とする台形を呈す。床面はガタガタである。床面の規模は南北長1.4m、北辺1.0m・南辺1.2m、床面積1.9m<sup>2</sup>を測る。最大壁高は20cmで、短軸方向はおよそN-26°-Eである。主柱はP 1・P 2の2本で南寄りにあり、P 1'・P 2'は建て替え前の柱穴と推定される。柱穴は壁際に位置し柱間は広く、柱掘り方は方形である。

覆土から赤色顔料塗彩の土師器高环片が出土したが固化できなかった。

#### ピット群

1号住居状造構の東側の円形のピットP 1・P 2は柱痕跡があり、P 2・3では赤色顔料塗彩の土師器環・皿がまとまって出土した。各規模は順に、直径36cm-深さ34cm、直径40cm-深さ36cm、直径31cm-深さ33cmを測る。調査区が限られているため全容は不明ながら住居周辺には掘立柱建物が存在する可能性が高い。

#### 落し穴

1号溝状造構の西側に位置し、3基が一線上に並ぶ。1号-2号間、2-3号間の中心間距離は3.3m、1.7mである。溝状造構に伴う深い掘削を受け、検出面はVI下のホーキ層である。1号落し穴はⅣa壁混じり粘質土層、2号・3号落し穴はⅣAT層に底面を設ける。

1号落し穴は歪な不整円形であるが、杭穴6本長方形列から杭穴5本円形列へ造りかえたものと推定される。ものの杭を抜いて、新しい杭を固定させた浅い凹みが中央部にある。2号落し穴も同様に浅い凹みがあり、杭が打ち替えられたものと考えられる。1号落し穴のA杭は空洞であった。その杭の太さは8cmである。3号落し穴には杭痕跡はなく断面すばまり形である。検出面での最大直径は1号から順に、1.3・1.2・0.8mである。

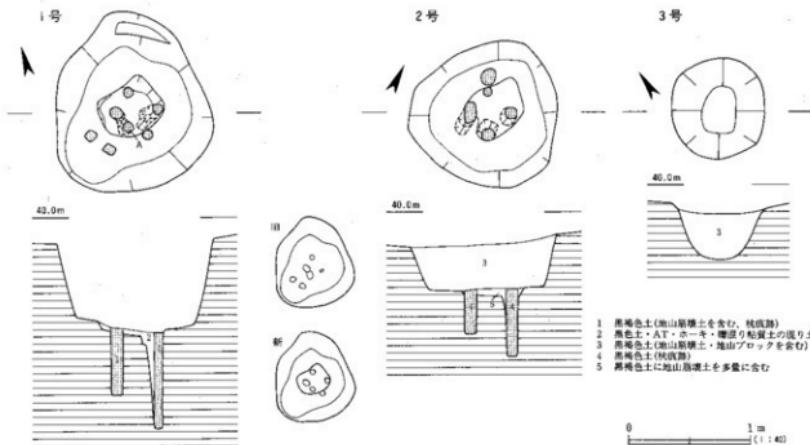
遺物は出土しなかった。

(根幹旨)

## 2 遺物

今回の調査では近代以後の施釉棲瓦・窓具、平安時代の瓦・土師器・須恵器・鉄製品・銅鏡、縄文時代の石器等が出土した。土師器・須恵器については観察表に一括した。

**施釉棲瓦** 調査区から相当量出土したがすべて破片で全形を知るものはない。赤茶色から黒色の釉薬がかかる。また、鬼瓦・軒瓦などは出土していない。



第11図 1号～3号落し穴造構図

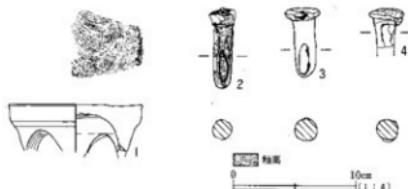
**窯具** 瓦窯関連施設出土。1は陶器の窯詰めに使われる焼き台と考えられる。上面の直径10.8cm、残存高4.0cm。上面は糸切りし、脚部は4本ケズリ出す。全面ともよく焼け薄く釉がかかった状態になっていて、上面と脚部の欠損した部分には濃く釉がかかっている。

2～4は針状の窯具で、瓦の窯詰めに使うハセと考えられる。長さ5.7～6.5cm、下部の直径1.6～1.9cm。頭部、下部いずれにも瓦が熔着し、剥がれた痕跡が認められる。3・4には表裏一对になるように熔着した痕跡があるが、2には数カ所の熔着・剝がれがあり、その上から釉がかかっている部分もあるため、数次にわたって再利用されていたことがわかる。

他に棒状の窯具で、瓦の窯詰めに使用されたモミ土と考えられるものが計43点出土している。幅・厚さとも3cm、長さはすべてが途中で折れているため不明である。表面には複数の圧痕が一面につき、1～2cm程度の間隔で瓦の圧痕が残る。釉薬が付着しているものもある。内1点、棒状の窯具の中に針状の窯具が埋まり込むものがある。

**瓦** 1号～3号溝状造構、1号住居覆土から出土した。いずれも破片だが、特に溝状造構出土のものは10cm以下の小片で非常に磨滅しているものが多い。布目はやや粗く、叩きが観察できるものについては繩目叩きのみである。

**軒平瓦** (図版7) 1号溝状造構の溝内上層から1点のみ出土。伯耆国分寺・国府分類の685型式に比定される。瓦当面上下をヘラケズリし、瓦当文様まで途切るように三日月形にカットしている。瓦当に接続する平瓦には繩目叩きが残る。胎土には1mm大の砂粒、赤褐色の粒子を多く含む。

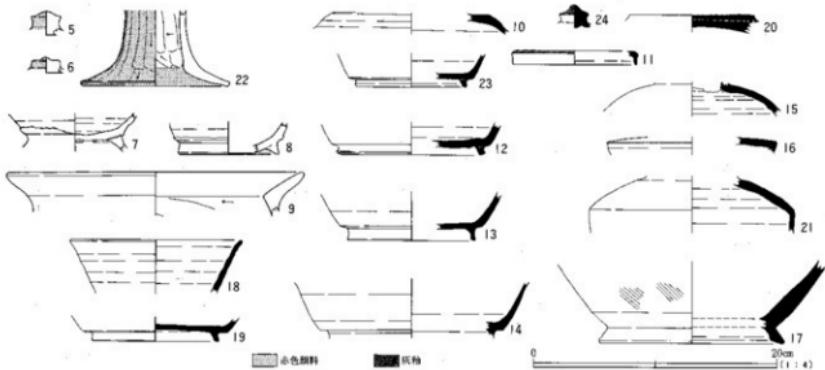


第12図 瓦窯関連施設出土遺物図



[土縫部の色は断面の色調：法量( )は推定値]

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手 法	黏土 烧成 色調 道存度 緒考
1号溝収集 標 溝底土 土壤	5	土師器 蓋		退化した宝珠つまみ。5の様は既 に。	その内面は、素面に平滑で磨耗している感 じ。	粘土焼成。焼成普通。淡白褐色。内外赤茶系顔料混入。 つまみ部分のみ。
	6					粘土焼成。焼成普通。明褐色。内外赤茶系顔料混入 だが、内面赤茶に残りが感じ。つまみ部分のみ。
溝底土	7	土師器 底B		高台の付く耳口の底部のみである。 高台は底盤の周縁に付ける。耳口はやや高めの高台が外に聞く。 耳口は底盤部は丸角を持ち、高台は 低く、脚部三脚式。	高台を貼り付ける際の粘土が、S部にはみ 出す。7の底盤部はヘラ切り後來調整に延 び。	粘土焼成。焼成普通。明褐色。内外赤茶系顔料混入 だが、内面赤茶に残りが感じ。つまみ部分のみ。
	8	脚部 (S.0)				粘土焼成。焼成良好。明褐色。道存度1/6。
溝底土 溝底	9	土師器 蓋	口径(24.0)	口縁部はやや細い。	口縁部内外赤茶コナゲ。体部内面へラケズ リ。	粘土やや粗い。1cm以下の砂較多量に含む。燒 成良好。褐褐色。道存度1/6。
	10	底盤 蓋		底盤部は平底で、一度底盤した後外 へ聞く。	底盤部はヘラ切り後ナダ。	粘土焼成。焼成良好。淡褐色。道存度1/11。
溝底土 下層	11	灰 稚 陶 器 蓋	口径(10.0)	口縁部は下方へ折り曲げられる。	天井部のみに施釉する。	粘土焼成。焼成良好。暗褐色。口縁部1/2。
	12	須恵器 蓋B	口径(11.3)	口縁部と底盤との境は明瞭である。 12は底盤へテラリ後ナダ。	12は底盤へテラリ後ナダ。	粘土焼成。1cm以下の砂較多量に含む。燒成普通。淡褐 色。道存度1/4。
溝底土 土壤	13		脚径(10.5)			粘土焼成。焼成良好。灰褐色。底盤外縁に灰がかかる。 底盤1/5のみ。
	14					粘土焼成。墨色物質を含む。燒成普通。外腹淡褐色。内 腹淡褐色。道存度1/10。
溝底土 土壤	15	須恵器 蓋		蓋部内面に口縁部を接合した際の粘土がは み出す。	蓋部内面に口縁部を接合した際の粘土がは み出す。	粘土焼成。1mm以下の砂較少量含む。燒成良好。 体部上半灰がかかる。暗青灰色。断面はセピア色を呈す。 体部上半1/3。
	16	須恵器 平 板				粘土焼成。黒色物質多量に含む。燒成良好。淡白灰色。 外腹光沢をもつ。道存度1/10。 ※2号溝状遺構(溝底土)底土破片がある。
溝底土 下層	17	須恵器 蓋・底 底盤部	脚径(15.0)	大型の蓋もしくは底の底盤。高台 は短く外へ聞く。底盤はわざかに 内へ向く蓋をなす。	外腹タキナダテタキ目をよく持す。	粘土焼成。黒色物質多量に含む。燒成良好。外腹暗 灰色。体部下半1/4。 ※2号溝状遺構(溝底土)底土破片がある。
	18	須恵器 底	口径(14.0)	18は直縁的に立ち上かる口縁部。 底盤がわざかに外反する。	内外赤茶コナゲ。外腹に粘土焼成跡みの痕 跡を残す。	粘土焼成。黑色物質少々に含む。燒成良好。暗褐色。 口縁部1/6。
溝 溝底土 土壤	19	須恵器 底B (未完成)	口径(16.0)	19は底盤の縁から底Bと萼たが 底Bの可逆性もある。蓋部と口縁 部の境は明瞭で、蓋部は短くわざ かに聞き、底盤は蓋をなす。	底盤外縁へテラリ後ナダ。底盤内面を現 して軽用意している。	粘土焼成。1cmの大砂粒をわずかに含む。黒色物質わ ざかに含む。燒成普通。淡黄褐色。底盤内面に点状に 朱墨残る。底盤1/4。
	20	須恵器 内腹壁		台形底盤現の縁部の範囲。底と海 との境は屈曲し明瞭である。縁は ほぼ平頭。	台に粘土凹板を貼り付けて底盤を作る。	粘土焼成。黑色物質の形跡含む。燒成良好。淡褐色。 底面に灰がかかる。底盤1/2。 ※面一側面の方形邊の台部が1号溝状遺構(土塹 堆土)及び2号溝状遺構(1号溝状遺構)から出土している。
3号溝収集 標 溝底土	21	須恵器 蓋		蓋部は明瞭に屈曲する。	内面コナゲ。 ※1号溝状遺構(溝底土及び土塹堆土)出 土破片あり。	粘土焼成。1mm以下の砂較多量含む。褐色物質 の細粒含む。燒成良好。暗褐色。断面はセピア色を 呈す。底盤上半に灰がかかる。底盤1/3。
造成段Ⅰ	22	土師器 蓋 环	脚径(11.0)	縁部は強く弧曲し大きく聞く。	脚柱部外腹黒引り、内腹へラケズリ。縁部 もコナゲ。	粘土やや粗。1cm大の砂粒含む。燒成良好。褐褐色。 脚柱部内面以下白色黒引跡。底盤1/3。
	23	須恵器 脚径	脚径 (9.0)	底盤は平底で、高台は無い。高台 の縁部は蓋をなす。	底盤の付け根に工具による凹みが進る。底 部外腹へラケズリ後ナダ。	粘土焼成。1mm以下の砂較多量含む。燒成良好。外腹青 灰色。内腹淡褐色。
調査区北西 上層	24	灰 稚 陶 器		やや退化した宝珠つまみ。中央部 は高く突出しているが、蓋の縁の 突出はそれほどない。蓋の火 舟部は非常に高い。	主に上面に灰がかかる。内面に粘土経痕 残る。	粘土焼成。黒色物質の形跡含む。燒成良好。淡褐色。 つまみ部のみ。



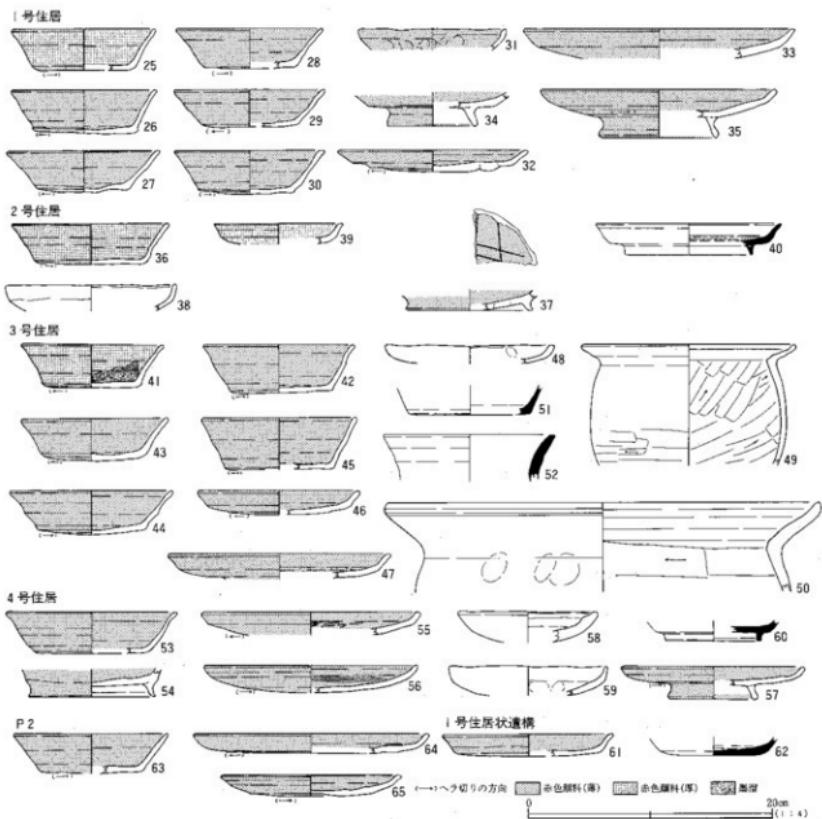
第13図 溝状造構・造成段出土遺物図

〔土器部の色調は断面の色調：注記（）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手 法	粘土 烧成 色調 速存度 備考
1号住居 NE区	25	土縁器	口径(11.7) 底径(7.4) 高さ(3.4)	口縁部は外方へわざかに外反しながら傾く。底部はほぼ水平。 27-30は25・26に比べて口縁部の外側幅が大きい。	口縁部は内外面ヨコナデ。底面内面ナデ。底部外側は基本的には無削型ののみへう切りし、ナデで仕上げる。底部外側の調節は、25は底面が平らになるまで、26はわざかにへう切り仕上げたもの。底盤が水位になるまで、27-29は底部が使うもののへう切りによって生じた差をなくすまで、30はへう切り後は木調整である。	粘土密。1mm以下の細かい砂粒、赤褐色斑点含む。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面赤色顔料塗付。底部に黒斑あり。口縁部1/10、底部1/4。
	26		口径 11.2 ～12.4 底径 8.1 高さ 3.6			粘土密。1～3mmの砂粒含む。焼成良。淡白褐色。内外面赤色顔料塗付。口縁部わずかに火傷。口縁部ひずむ。
	27		口径 12.3 底径 7.3 高さ 3.4			粘土密。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面赤色顔料塗付。口縁部1/3次損。
	28		口径(11.8) 底径(7.9) 高さ(3.3)			粘土密良。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面赤色顔料塗付。口縁部1/3、底部1/5。
	29		口径(12.2) 底径(7.8) 高さ(3.1)			粘土密良。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面赤色顔料塗付。1/4の破片。
	30		口径(11.9) 底径(7.7) 高さ(3.4)			粘土密。1mm以下の砂粒わずかに含む。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面赤色顔料塗付。2/3の破片。
	31	土縁器	口径(12.0) 底 長	厚さ・形態ともに不整である。	口縁部ヨコナデ。底部以下は指オサエ。	粘土密。焼成良好。焼成後。内外面赤色顔料塗付。口縁部1/8。
	32	土縁器	口径 15.2 底高 1.8	口縁部はわざかに削出し、外へ流線的に軽く聞く。底部は多少凸凹がある。	口縁部ヨコナデ。底面内面ナデ調整だが難である。底盤外側最外周のみへう切りし、ナデで仕上げる。へう切りの痕跡はかなり大きくなれる。	粘土密。1mm以下の細かい砂粒含む。焼成良。淡白褐色。内外面赤色顔料塗付。底盤内面に黒斑あり。口縁部1/2。
	33	土縁器	口径(21.0) 底 長	底部は削出ししている。他の點とは 粘土・色調などが異なるため、別 器種の可能性がある。	底盤内側へうきき後ナデ調整。外側へう 切り後丁寧なナデ。	粘土密良。焼成良好。内外面赤色顔料塗付。口縁部1/5。
	34	土縁器	口径(7.0) 底 長		35は口縁部・底部との境が明瞭で ない點に高台がつく。底盤は丸い。 34は輪郭部に凹みを持つ。両方とも 高台は高い。	粘土密良。1mmの大砂粒含む。焼成良。焼成後。内外面に赤色顔料を塗彩するが底盤外側脚部より内側には彩色されない。底部1/3。
SE区・ 2号住居上 層	35		口径(19.0) 底 長	(9.3) 4.6		粘土や泥。1mmの大砂粒含む。焼成良。淡白褐色～淡赤褐色。内外面に赤色顔料を塗彩するが、脚部より内側には彩色されない。底部1/12、高台1/3。

〔土縫合の色調は断面の色調：注記( )は推定値〕

出土位置	No.	移 種	法度(cm)	形 細	手 法	粒土 混成 色調 滗度 前写
2号住居 W区	36	土縫合 B/A	口徑 12.6 底径 8.3 器高 3.4	口縫部は外反気味に上方へ開く。 底部はやや違うものの平底。	口縫部はヨコナデ。底部内面はナデ。底部 外面は最外周のみヘタ切りし、後にナデで 仕上げるが、ヘタ切りにより生ずる段わ ずかに残る。	粒土密。1~4mmの大砂粒含む。焼成良。淡白褐色。 内外混赤色顔料塗影。底部外面から口縫部底面まで の黒帯あり。口縫部1/6欠損。
	37	土縫合 B/B	断面部径 (10.0)	口縫部が出土していないので、底 部の可能性もある。底部は2mmを 持ち、短い高台が外反気味に付く。	内面はナデ。高台はナデで付けるが、その 内側は等なナデで、粘土色の底跡を残す。 内面に焼成後の縫跡が認められる。高台の 内側には彩色の可能性がある。	粘土やや薄。焼成良。淡褐色~淡青褐色。底部外面以 外の内外面に赤色顔料塗影。底部1/4。
W区・ 3号住居S E区	38	土縫合 B	口徑 14cm 程度	口縫部がやや内済する薄手の皿。 口縫部は底打ち厚さも不均。	口縫運動をほどんと使わず、指オサエ、ナ デで成型、調整する。	1mm以下の細かい砂粒多く含む。焼成やや悪い。淡白 褐色。1/8の破片。
	39		口徑(10.4)	小型の皿。高台又は脚が付くと考 えられる。口縫堆部はわずかに外 へ引き出される。	内面はヘラミガキ後ナデ。底部外面はヘラ ケズリ後ナデ。赤色顔料は濃く、ムラなく 塗跡される。	粒土密。1~2mmの大砂粒含む。焼成良。淡褐色。内 外面赤色顔料塗影。口縫部1/5。
上層	40	須恵器 B/B (堆積物)	口徑(15.0) 底径(10.4) 器高(2.6)	幕高は低く、薄い口縫部が外へ引 き出される。高台も薄く、真っ直 ぐ下に延びる。	底部内面が膜として板状される。底部外 面は外縁2/3程度をヘタ切りし、後ナデ。	1mm以下の細かい砂粒をわざかに含む。焼成ややあま い。淡褐色。1/2の破片。
3号住居 S-E-Aト	41	土縫合 B/A	口徑(11.4) 底径(7.4) 器高(1.0)	わざかに内折しながら外上方へ延 びる口縫部にはばら平安の底跡を持 つもの41-43。口縫の外側角度が大 きいものの44。深いものの45がある。	口縫部はいずれもヨコナデ。底部外縁の調 整は基本的に外周のみヘタ切りした後ナ デ調整を行なう。ナデ範囲は41-43は底部が 平底となるまで、43-45はナデが底面で画面 平底を失い、44-45はほどんとナデ調整 は行われないということがある。	1~3mmの大砂粒わざかに含む。焼成普通。淡黄褐色 ~淡白褐色。内外混赤色顔料塗影。内面黒帯のとして 利用。口縫部1/2欠損。
	42		口徑 11.9 ~12.8 底径 5.3 器高 4.0			粒土精良。焼成やや薄。淡白褐色。内外混赤色顔 料塗影。42は完形。
E区・上層	43		口徑(11.8) 底径(7.8) 器高(3.6)			粒土やや密。赤褐色の粒子含む。焼成普通。淡白褐色 ~淡白褐褐色。底部外縁以外に赤色顔料塗影。底面に わざかに板目のこる。2/3の破片。
	44		口徑(13.2) 底径(8.7) 器高 3.6			粒土精良。焼成良。内外混赤色顔料塗影。 1/3の破片。
N区 下層	45		口徑(12.4) 底径(8.1) 器高(4.3)			粒土精良。焼成良。内外混赤色顔料塗影。 1/3の破片。
	46	土縫合 B	口徑(13.5) 底径(2.0)	短く立ちあがる口縫を持った浅い 皿。底盤はややふくらむ。	底部外縁、縫跡のみヘタ切りし、後ナデ で仕上げるが、ヘタ切りの段わざる。	粒土精良。焼成良。淡白褐色。内外混赤色顔料塗影。 1/3の破片。
W区	47	土縫合 B/B	口徑(18.0)	深い皿に高台が付く。	底部内面に常に重なる底が付く。底部外 面はヘタ切り後ナデ。その重心側に高台を 付けるためのヨコナデが施される。	1~2mmの大砂粒含む。赤褐色の粒子含む。焼成普通。 内外混赤色顔料塗影。1/3の破片。
	48	土縫合 B	口徑 13cm 程度	子孫ね縁の不整な薄手の皿。	口縫運動を利用しないナデで成型される。	粒土粗く1mm以下の砂粒多く含む。焼成あまい。淡褐 白色。1/8の破片。
S区 上層	49	土縫合 B	口徑(17.2)	口縫部は外へ大きく開き、縫跡は上 方に折り返される。	口縫部はヨコナデ。体縫部は斜め上方へ のヘタケズリ。外縁、最大底径以下を横方 向のヘタケズリ後ナデ。	粒土密。焼成良。暗褐色。外縁、口縫部内面に模様骨 口縫部1/2欠損。体縫部下平、底部大穴。
	50	土縫合 大型 模型	口徑(35.4)	口縫部は外上方へわざかに内凸気 味に震く。	口縫部外縁に薄い化粧めぐらせた後ヨコ ナデ。	1mm以下の細かい砂粒を非常に多量に含む。焼成普通。 黒褐色。口縫部1/6のみ。
E区 上層	51	須恵器 B	底径(10.9)	口縫部と底部との境の底盤はシャ ープである。	底部外縁ヘタ切り後ナデ。	粒土疏。黑色粒子多く含む。焼成ややあまい。淡褐 褐色。底部1/6欠損。
	52	須恵器 B	口徑(13.9) 底径(8.4) 器高(3.5)	外反しながら外へ開く口縫部。堆 積部は落す。	口縫部内面ヨコナデ。	粒土精良。焼成良好。淡褐色。内外混赤色顔料塗影。 1/10の破片。
4号住居 検出面	53	土縫合 B/A	口徑(13.8)	口縫部は外にくらむ感じで立ち 上がり、底盤は外反する。比較的 器盤は落す。	底部外縁はヘタ切り後未調整に近い。	粒土精良。焼成良好。淡褐色。内外混赤色顔料塗影。 1/10の破片。



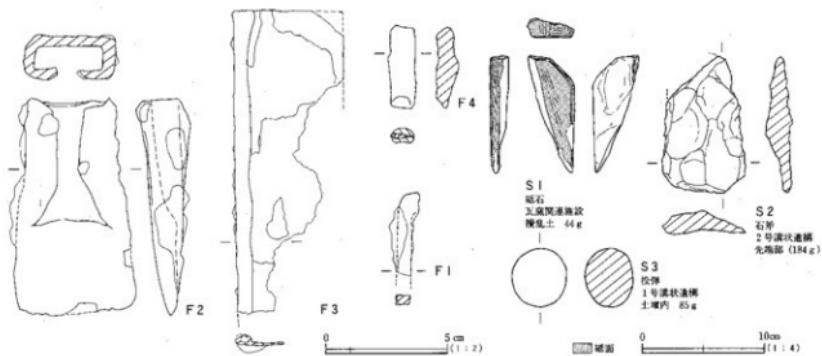
第14図 堪穴式住居・住居状遺構・ピット出土遺物図

(土師器の色調は断面の色調：括弧( )は推定値)

出土位置	No.	器種	法長(cm)	形態	手法	黏土 焼成 色調 遺存度 備考
4号住居 横断面	54	土縁器 环B	脚径(10.3)	环の底部外縁に沿って高台が付く。高台は先端ほど高くなり、わずかに外反する。	内面器底の荒れが著しく、焼成不明。	粘土稍良、焼成普通。淡黄褐色。内外面赤色顔料塗りだが高台の内面には彩色されない。底部1/2。
	55	土縁器 且	口径(17.2)	底盤は焼成し口縁部は高く立ち上がる。底部内面平滑。割器種の可能性あり。	底部内面チテ調整だがヘラミガキ様の施設の跡が確認される。外面へラ切り後の調整跡等。	1~3mm大的砂粒多く含む。焼成良好。赤褐色。内外面赤色顔料塗り。口縁部~底部1/6。
	56	土縁器 且A	口径(17.3) 高さ(2.3)	器底は軽く底盤は丸味を持つ。口縁多点止め。器形やや不規。	内面板状工具によるナデ。外面へラ切り後ナデ。へラ切りはかなり深くまで削いている。へラ切りの段差はないが、やや歪曲している。	粘土密。1mm以下の砂粒含む。焼成良。淡白焼青色。内外面赤色顔料塗り。1/2の破片。
床面上 W区	57	土縁器 且B	口径(14.7) 脚径(6.7) 高さ 2.7	器底の低い處にやや外に張り出す。高台が付く。	底部内面ヘラミガキ後ナデ調整。底部外縁へラ切り後ナデ調整するが、へラ切りの段差が残る。	粘土稍良。焼成良。淡白焼青色。赤色顔料が塗影されるが高台内面の焼成から内面には彩色されない。顔料も非常に多い。1/2の破片。

〔土器等の色調は断面の色調(法量( )は推定値)〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手 法	胎土 焼成 色調 焼存度 備考
4号住居 W区	58	土師器 皿	口径(11.0)	小型で直のみある形態。器壁は厚い。底部に丸味を持ち、口縁部になどらかに聞く。口縁内面には役を持つ。	回転台を利用しての成形・調整ではない。内面ナナガだが、一樣ではない。	胎土幅く1mm以下の細かい砂粒含む。更にナナガ。赤褐色の粘土含む。焼成良。内面赤褐色。外面黒褐色。1/2の破片。
	59		口径 13cm	手揉み性の薄手の盤。口縁部は上部に引き当される。	回転運動を利用せず、ナデ・指オサエで成形・調整される。	1mm以下の細かい砂粒多く含む。焼成普通。焼成褐色。1/8の破片。
	60	陶器器 碗B はなB	腹径(7.6)	底部は平底で、高さは短く、縁部には蓋がある。	底部へ切り後ナナ。	胎土粗良。1mmの大砂粒わざかに含む。焼成あまい。焼成色。1/3の破片。
1号住居底 遺構 地面	61	土師器 皿A	口径(13.9)	口縁部はゆるやかに屈曲し、やや外反きみに立ちあがる。器壁は軽く底盤は平坦。	底部内面へラミガキ後ナナ。底部外縁へラミガキ後ナナ調整を施し段を残さない。	1~2mmの大砂粒含む。焼成普通。焼成褐色。外表面に赤色顔料を塗抹するか、底部外縁部が黒化しているため不均。1/10の破片。
	62	陶器器 碗A	底径(8.8)	底部と口縁部の境はシャープではない。蓋部内面は平底。	底部外縁へラミガキ後ナナ調整に近い。	胎土粗良。1mmの大砂粒含む。焼成普通。焼成褐色。底盤1/4。
P2 上層 埋土中	63	土師器 瓶A	口径(13.0)	蓋部は平底で、口縁部の外傾度は大きい。	底部外縁へラミガキ後ナナ。ヘラ切りの段は残らない。	胎土粗良。焼成良好。焼成褐色~黒褐色。外表面赤褐色を帯びる。底盤と口縁部の境に黒斑あり。1/5の破片。
	64	土師器 瓶	口径(18.0)	口縁部はわずかに立ちあがる程度の薄い底。	内面は平底。外縁はヘラ切り後ナナが、段を残す。	胎土粗良。焼成やや悪い。白褐色。外表面赤褐色を帯びる。1/8の破片。
	65	土師器 瓶A	口径(14.2)	口縁部は内側凹峰にわずかに立ちあがる。内面中央部は軽土緑の凹凸を残す。	口縁端部は面をなし、縁前内側に細い沈線が一側をぐる。底部外縁部調整に近く、段目を残す。	胎土粗良。赤褐色の粘土含む。焼成良。焼成褐色~焼成褐色。外表面赤褐色を帯びる。1/3の破片。
大型甕 - 1号溝状造構 (溝下層黒褐色土~土壤埋土) 8点・3号溝状造構 (黒褐色土) 1点						
4号溝状造構 (土壤埋土) 1点・1号土壙1点・1号住居1点・造成段I 1点						
大型甕 - 1号溝状造構 (黒褐色土) 1点・5号溝状造構1点・3号住居 (覆土下層) 1点						
大型甕 - 1号溝状造構 (黒褐色土) 3点・2号溝状造構 (擾乱土) 2点						
瓶口縁 - 1号溝状造構 (土壤埋土) 2点・2号溝状造構 (擾乱土) 1点						
大型甕 [菊花状当具痕] - 1号溝状造構 (土壤埋土) 4点・3号溝状造構 (黒褐色土) 1点						
1号・3号・4号溝状造構及び1号土壙は切り合っているので、掘り直しの際に混入する場合もあるかと思われるが、1号溝状造構と2号溝状造構の土壤埋土に含まれていたもの(16・21)や溝状造構と住居にまたがる上記2例は、住居出土須恵器が僅かであることを考え合わせると、単に住居使用の土器の転落とするには理解しがたいものがある。						
鉄釘 (F1) 1号溝状造構内の黒褐色土から出土。断面は0.6×0.4cmの長方形。頭部は折り曲げられ、ほぼ正方形になる。残存長3.3cm、重量5g。						
袋状鉄斧 (F2) 1号住居覆土から出土。長さ9.0cm、刃部幅4.5cm、装着部幅3.7cm、重量は125g。上から2/5の部位にわずかに肩をもつ。刃部の平面形は左側から1/3に頂点を持つ下に張り出した三角形になる。装着部の内法は2.9×1.1cmの長方形で、内側には木質があわせに残る。木目は鉄斧の長辺と平行である。						
不明鉄製品 (F3・F4) F3は1号住居P4から出土。幅4.5cm、厚さ0.9mmの薄い板状の鉄製品である。残存長12.5cm、重量26g。左側は丸い筒状に折り返され、上端は筒が押しつぶされ閉じている。同一個体の破片から、右側の角は直角になる。						



第15図 鉄製品・石器遺物図

F 4は4号住居覆土から出土。長さ3.4cm、幅1.1cm、最大厚1.0cm、重量は4g。断面には厚さ1.8mmの三角形の地鉄の周りにさらに鉄を巻いて鍛造したような状況が観察できる。

銅津 1号溝状造構北西の土壤内から1点出土。長さ2.5cm、最大幅1.0cm、重量3g。

(同上)

註 佐藤典治他 「伯耆國分寺跡発掘調査報告I」 倉吉市教育委員会 1971

#### IV まとめ

##### 遺構

###### 1 瓦窯関連施設

当地は、積雪地帯に普及した施釉棟瓦である石州瓦の技術をうけて、近世から現代まで消費地の近傍で操業された地瓦の生産地である。溝の床面で窯具が面的にまとまって出土しているので、瓦生産にかかわる何らかの施設があったものと考えられる。

###### 2 国府域

国衙周辺の集落としては矢戸遺跡・宮ノ下遺跡・櫛塚遺跡・不入岡遺跡が知られ、これらは久米ヶ原丘陵の縁辺部に位置している。国衙周辺の地形的制約とこれまでの各遺跡の調査状況から、方格地割りをもつような明確な国府域は存在しないものと判断され、当遺跡もまた、国衙北限溝の僅か260m北に位置しているが、東西南北に沿った方格地割は認められなかった。

###### 3 平安時代の遺構の時期

遺構の切り合いから確實にいえる新旧関係は、造成段I→1号・2号溝状造構・1号溝状造構側溝→造成段II、造成段II→4号住居・4号溝状造構→3号溝状造構・2号住居状造構→2号住居、である。出土遺物から構築・廃絶時期を推定すると、住居をはじめほとんどの遺構が伯耆国庁第2段階に構築・同時存在し、1号・3号溝状造構のみ伯耆国庁第3段階まで存続したものと考えられる。

#### 4 溝状造構

溝状造構の特徴は、溝の底に土壌が一定の間隔で連なること、そして注目されるのは溝内が酸化焰焼成により硬化していたことである。このような溝状造構に類するものとして、宮ノ下遺跡<sup>3</sup>3地区遺構1をあげることがができる。宮ノ下遺跡は、国分尼寺跡（法華寺畠遺跡）の西限の柵列から約50m離れた、標高30mの丘陵の東斜面に位置する。遺構1は、溝底に楕円形の浅い土壌が心々距離60~70cm間隔で連なり、検出長は19m、溝幅は斜面下方で4m、斜面上方で1.8mを測る。蛇行しながらも北東から南西方向へ丘陵の傾斜に沿って緩やかに上昇し、その傾斜角は6°である。土壌は5~7個で群を形成し、斜面上方に位置する1群の土壌の底には焼土面が認められている。報告者は出土遺物から鎌倉時代以降とし、遺構1の性格として①墓道②古墓群③胎兒あるいは胎盤の埋納擴群を想定している。向野遺跡と比べると被熱面が部分的であること、溝底の土壌が途切れること、やや大きめの礫が敷き詰められていることが異なるが、同様のものとみてよからう。

これら溝状造構に共通する特徴をさらに細かく抽出してみると、○丘陵緩斜面に位置している。○溝と土壌の幅は丘陵上方へいくにしたがって徐々に狭くなる。○勾配は約4°で、先端部になるとやや急になって終わる。○1号・2号溝状造構は併列し、1号からは3・4号が分岐し、2号からは5号が分岐している。○土壌は重複し、掘削が繰り返されている。○土壌埋土は人為的に埋め戻され、土壌上面には強い硬化面が認められる。○遺物は瓦と土器の碎片・礫が埋土内に混在する。細片で磨滅が著しく、再加熱された痕跡がある。極めて遺物は少量であり広範囲に散在する。などがあげられる。生産遺跡及びその周辺では、焼土塊・炭・焼き損じ品の出土量が多い<sup>4</sup>といいう。調査では特に目立つものはなかった。

1号溝状造構と2号溝状造構とは工法に違いはあるが、ほぼ同規模で同方向である。しかも同時期に構築されたとすると、本質的には同じものと考えなければならない。最も大きな違いは、2号溝状造構には被熱面がほとんど認められなかったことである。被熱面は、1号溝状造構内でもホーキ層を地山とする部分にあり、中間の礫混じり粘質土層を地山とする部分には認められなかった。焼成はホーキ層に伴うものと推測することができる。大山の火山砂であるホーキ層は、この辺りでは地表下約0.5mに上のホーキ層から下のホーキ層まで約30cmの堆積がある。粗粒砂と小礫が互層状をなし非常に硬質であるが、露出したままではクラックが縱方向に入ってブロック状に崩壊していく土質である。ホーキ層を叩き締めて硬化させることは無理であり、ホーキ層の焼成の意味を地山の硬化に求めてはどうだろうか。礫混じり粘質土層は、ホーキ層・A T層のさらに下層で地表下約1mに約60cmの厚い堆積がある。小礫を僅かに含む粘性の強い土質である。2号溝状造構の土壌埋土は固く丁寧に埋め戻され、礫混じり粘質土を地山とする土壤内を填土によって硬化させているとみることができる。2号溝状造構の土壤埋土が多種存在したのは、深い掘削による排土の利用によるものと考えられる。また、1号溝状造構では浅く広い土壌、2号溝状造構では深く小さい土壌であったが、この形状の違いも地盤の土質と厚さの差によるものと推定される。

こういったものは、いわゆる波板状凹凸面と称される、道路構築の際の基礎工事に伴う造構の可能性がある。路面の下を掘り窪めて叩き締め、それを丁寧に埋め戻して固い路面を造る方法である。この一般的な方法をとるには、礫混じり粘質土層までの深い掘削が必要であり、しかも硬いホーキ層を取り除かなければならない。ホーキ層までの浅い掘削・焼成による地盤の硬化が、労力の省力化による工法としての合理的な結果であると理解されるのである。大山の火山灰土に適応させた1号溝状造構の方が、2号溝状造構よりも後出的といえるが、使い分けされていた可能性も否めない。出土遺物をみると、2号溝状造構よりも1号溝状造構の方が長らく使用されたことがわかり、耐久度もまた推し量ができるのかもしれない。類似する造構の詳細な調査報告の蓄積をまたねばならず、道路造構の可能性があるということに留めておきたい。

## 5 壺穴式住居

集落として把握できるほどの広範囲の調査ではないが、問題点を整理してみたい。

存在／畿内では7世紀には壺穴式住居に変わって掘立柱建物が一般化し、東国では8世紀後半以降に掘立柱建物が普及はじめた。伯耆国府城は確定されてはいないが、調査によって、国衙の至近距離に依然としてこのように壺穴式住居が存在することがわかった。

規模／当遺跡の壺穴式住居は床面積9m<sup>2</sup>の1号住居を最大とする。掘立柱建物の普及とともに、特に8世紀以降急速に壺穴式住居は小型化ていき、壺穴式住居は厨として住まいから分離していくと考えられている。複数の建物で住まいが構成されるので、壺穴式住居を単独でみるのではなく周辺の状況がわかり、壺穴式住居と住居状遺構と判別できるものをみながら壺穴式住居の面積を比較してみる。

7世紀後葉に比定される大塚町上種第5遺跡では5号住居が床面積11m<sup>2</sup>で、約5m離れた9号住居が床面積19m<sup>2</sup>である。5号住居は9号住居に付随する住居状遺構の可能性がある。7世紀後半～8世紀前半に比定される觀音堂遺跡A地区では、壺穴式住居6棟が25～32mの距離をもって半円状の配置をとり、床面積は19～38m<sup>2</sup>と大きい。<sup>註4)</sup>8世紀後半～9世紀前半に比定される東伯町森藤第2遺跡10号住居や森藤第3遺跡1号住居は、主軸方向を揃えた掘立柱建物數棟が群在する一角に一棟だけ位置する。隣の壺穴式住居までそれぞれ70m・83mの距離があり、床面積はそれぞれ約25m<sup>2</sup>・18m<sup>2</sup>と大きい。<sup>註5)</sup>7～9世紀に比定される矢戸遺跡では壺穴式住居10棟・住居状遺構2棟で、各住居間は4～17mの距離があり、床面積9～30m<sup>2</sup>である。<sup>註6)</sup>住居状遺構の床面積は2～3m<sup>2</sup>である。<sup>註7)</sup>9世紀に比定される中尾遺跡6号住居は、掘立柱建物に隣接し床面積5m<sup>2</sup>である。<sup>註8)</sup>以上の例からみると当遺跡の壺穴式住居は非常に小型しかも密集していることがわかる。

密集／住居すべてが同時併存ではないとしても、4号住居を除く住居・住居状遺構間は1m以下しかない。これ以上の接近は無理というところまで近接している。小型であるうえに主軸方向を同じくして密集しているのも大きな特徴である。いずれも主軸方向は溝状遺構に沿っているが、この住居群と4号住居との境界に5号溝状遺構があるとみることもできる。

構造／小規模であるにもかかわらず、主柱穴を備えた平面形のくずれのない規格的な構造であり、さらに小さい住居状遺構を作っている。また、3号・4号住居はともに東辺壁際中央に方形壇を設けており、管見する限り方形壇の例はない。調査では、方形壇が階段あるいは棚として利用された痕跡は認められなかった。仮に、4号住居では西壁から主柱穴までが広いので、そこを住居入口部の採光を利用した室内作業空間と推定するならば、方形壇は住居奥部となる。

遺物／須恵器の占める比率は低いにもかかわらず、2号住居では転用硯が出土しているので、これを積極的にとらえるならば、居住区とはい文字を記述するような施設と考えることができる。器種構成を一般集落と比較すると、壺蓋等の貯蔵・煮沸形壠土器が明らかに少なく、壺皿のような供膳形壠土器の土師器が多かった。甕片は3号住居のみの出土で、壺・土製支脚はいずれの住居も破片すら認められなかつたことから、住居が調理の場であったかどうかは疑問である。須恵器については、住居覆土と溝状遺構土壤の埋土に同一個体の破片が存在することから、住居の時期を溝状遺構の構築時あるいは修復時に限定できるのではないかと推測される。

集落の性格／存続時期は土器から判断すると伯耆国第2段階、いわば国府として政治的に最も充実した段階である。小型の住居が同一の方向性をもって密集していることから、自然発生的な集落というよりも目的をもって人為的に計画された集落の可能性が高いと考えられる。一般の農村とは異なる形態の集落とすると、例えば、国衙の建設工事や整備あるいは維持管理のために勤員されてきた人達がどの様な生活形態をとっていたか考える必要があろう。

律令制下、伯耆国衙と四王寺にはさまれた古地は何に利用されていたのかをうかがい知る資料となつたが、国衙周辺の景観をイメージするには、今後のさらなる資料蓄積と比較検討に委ねたい。  
(根幹智)

## 遺物

今回、住居内から比較的まとまった量の土器が出土した。その中で、研究の進んでいる土師器環A（第14図）を中心に特徴を述べる。

向野遺跡出土の環Aは、縦じて口縁は外方に長く延びて器高は高く、底部はやや狭く口縁部の外傾の度合いが大きい。底部外面は、ヘラケズリして仕上げるものはなく、確認できるものはすべて周縁のみヘラ切りする痕跡を残す。以上の特徴は伯耆国府第2段階に比定される。個々の底部の調整技法をみると、ヘラ切りによって生じた段を擦り消しているもの（25・26・36・41・42・61、図版8）、ナテを施すものの平坦さを欠くもの（27・28・29・43、図版8）、ヘラ切りした部分はほぼ未調整で段差をそのまま残しているもの（30・44・45・53、図版8）に分類される。出土したものに破片が多く形態の変化は捉えにくいが、ほぼ完形品の26・27・36についてみてみると、ヘラ切り後丁寧に調整する26・36と調整の難な27とは口径は変わらないものの、27の方が底径が小さくなり、底部に若干の丸味を帯びる。以上の分類は順に変遷すると考えられているが、形態的な変化はわずかなものであり、底部の調整技法の差も一連の流れとして理解できる変化であるため、上記の3分類はさほど間を開けずに連続するものであると考える。

それぞれの時期観についてみる。過去、伯耆国府において土師器の編年がなされており、その概要について述べると、国府第2段階はSD37様式・SD33様式・SK05様式・SD35様式・SD38様式に大きく分けられ、SD37様式は1類と2類とに細分される。SD37様式1類の环は口縁の外傾の度合いが少なく底部を平坦につくり、SD37様式2類は口縁の外傾が大きくなり底部は狭くなるがヘラ切りの段は調整する。次のSD33様式の特徴はSD37様式2類のものよりも口径は小さくなりさらに口縁が外傾し底部は未調整で板目を残すものも多い。向野遺跡出土の环の特徴を国府編年に当てはめると、底部の調整が丁寧で平坦なもののがみられるが、その口径はSD37様式2類よりもわずかに小さくなり、口縁はさらに外傾する傾向にあり、ヘラ切りによる段差の擦り消しも完全ではない。底部に平坦さを欠くもの・未調整のものはSD33様式以降に比定されると思われ、底部を丁寧に調整する环はSD37様式からSD33様式への過渡的な様相を示すと考えたい。环・皿類には基本的には赤色顔料が塗彩されるが、底部調整の丁寧なものの中には顔料が厚く塗彩され、色合いも濃く第1段階の色に比較的近いもの（25・36・41）がみられ、底部が平坦でないものの中には底部を塗り残すもの（43）もみられることなどからも上記の編年観は矛盾しないと思われる。

次に各住居からの出土状況についてみる。量としては1号・3号住居が多く、2号・4号住居が少ない。しかし、各住居から同じように古相を示すものから新相を示すものまで出土しており、遺物からは各住居の時期差はうかがえない。器種についてみると、まず、38・48・59と58のように、回転台成形ではない手捏ね様の皿が2種共併せて出土したことが注目される。前者はすべて小片だが個体数が多い。両者とも胎土が粗く1mm以下の細かい砂粒を多量に含み、特に58の胎土は甕に似る。内面も平滑でなく、一般的な食器としての「皿」とは考えにくく。奈良～平安時代にかけての集落からは大榮町の向野遺跡から前者の破片が1点出土しているのみで、性格共に検討を要する。また、住居内から出土したのは供膳用具である土師器環・皿がほとんどであり、煮沸用具・貯蔵用具は3号住居から甕が2点出土したのみで、甕・土製支脚・須恵器甕などは破片すらも出土していない。また、土師器と須恵器の出土した割合は圧倒的に土師器が多く、奈良時代以降の竪穴式住居の発掘例からすればその全体の出土点数と共に異常なことといえる。このことは竪穴式住居の性格を考えるだけでなく、土師器の消費

～廃棄のシステムを考える上で注目されると考えるが、限られた範囲での調査のため、集落をはじめとして生活領域のはとんどが未調査であり、周辺の調査例を待ちたい。

(岡平)

註

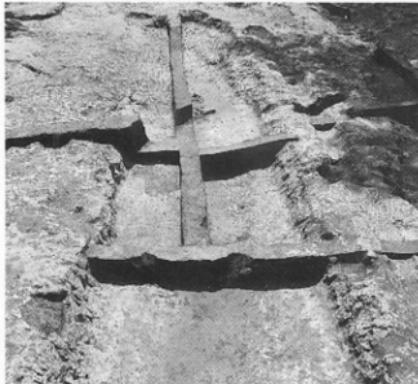
- 1 漢田廣幸 「奈良・平安時代」『新編 倉吉市史』第1巻 1996
- 2 平方幸雄 「宮ノ下遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1976
- 3 鹿野研究会編 「古代の土師器生産と焼成遺構」 真福社 1997
- 4 馬瀬義則他 「上種第5遺跡発掘調査報告書」 大栄町教育委員会 1985
- 5 根鈴輝雄 「觀音堂遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1986
- 6 大賀清浩 「森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書」 東伯町教育委員会 1987
- 7 大賀清浩 「水溜り・舞龍探場遺跡、森藤第3遺跡発掘調査報告書」 東伯町教育委員会 1988
- 8 亀井照人他 「横田・矢戸遺跡発掘調査概報」 鳥取県教育委員会 1971
- 9 根鈴智津子他 「中尾遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1992
- 10 器種の分類、編年については伯耆国庁の報告に従った。  
糸津一郎 「田 造物 2 土器類」『伯耆国守路発掘調査概報(5・6次)』 倉吉市教育委員会 1979
- 11 馬瀬義則・根鈴智津子 「向野遺跡・後谷遺跡発掘調査報告」 大栄町教育委員会 1984
- 12 積穴式住居出土の土器は、いずれも出土数は数点のみで、比率はほか同じく須恵器の方が多い、土師器は幾種類が目立つ傾向にある。  
平方幸雄 「中峯遺跡発掘調査概報」 倉吉市教育委員会 1975、および註5・註6・註7文献による。

参考文献

- 1 阪田充晴 「埼玉県所沢市東の上池跡」『日本考古学年報42(1989年版)』 日本考古学協会 1991
- 2 近江俊秀 「鶴神遺跡検出の道路状遺構」『古代交通研究 第3号』 1994  
「道路遺構の構造—波板状凹凸面を中心として—」『古代文化 47』 1995



調査区全景（西から）



瓦窯関連施設△全景（北西から）▽窯具出土状況（北東から）▷全景（南東から）



全景（北西から）



全景（南東から）



発掘状況（北西から）



中間部分（北西から）



中間部分（南東から）

1号溝状造構



ベルト断面斜面下方（南西から）



斜面下方（南西から）



斜面下方（北西から）



1号・2号溝状造構間の小溝（南東から）



斜面上方（東から）



2号・5号溝状遺構（北西から）



2号溝状遺構（南東から）



2号溝状遺構（北西から）



2号溝状遺構（南東から）



3号・4号溝状遺構（南から）



1号～5号溝状遺構（東から）



1号住居（西から）



4号住居（西から）



1号・2号住居、1号・2号住居状遺構（北から）



3号住居（東から）



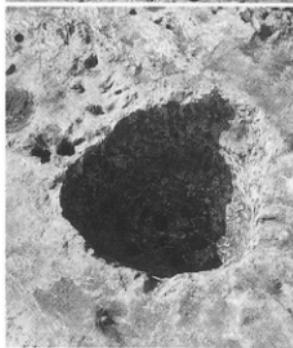
3号住居方形壙（西から）



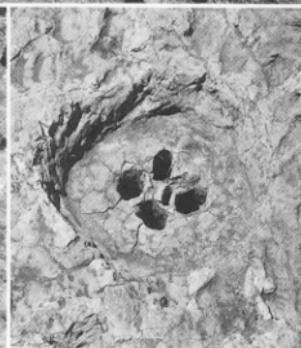
1号～3号住居

2号住居状造構（北から）

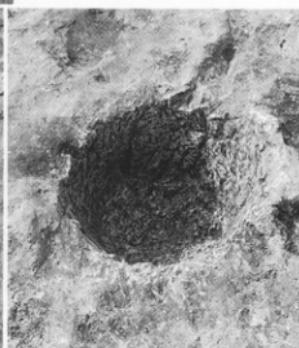
作業風景（北から）



1号落し穴（南から）



2号落し穴（南から）



3号落し穴（南東から）

窯具



軒平瓦



1号溝状遺構

3 2

8 24

F 1

(1:2)

須恵器大甕  
表

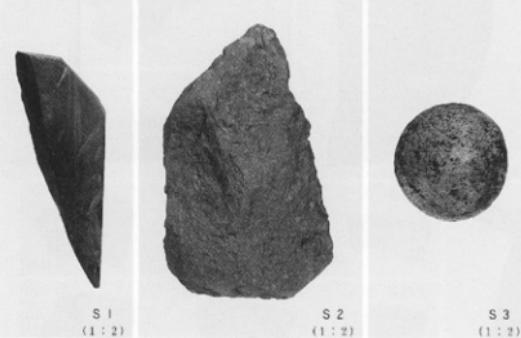


23



1号溝状遺構

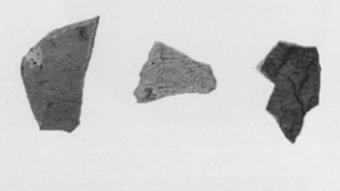
裏

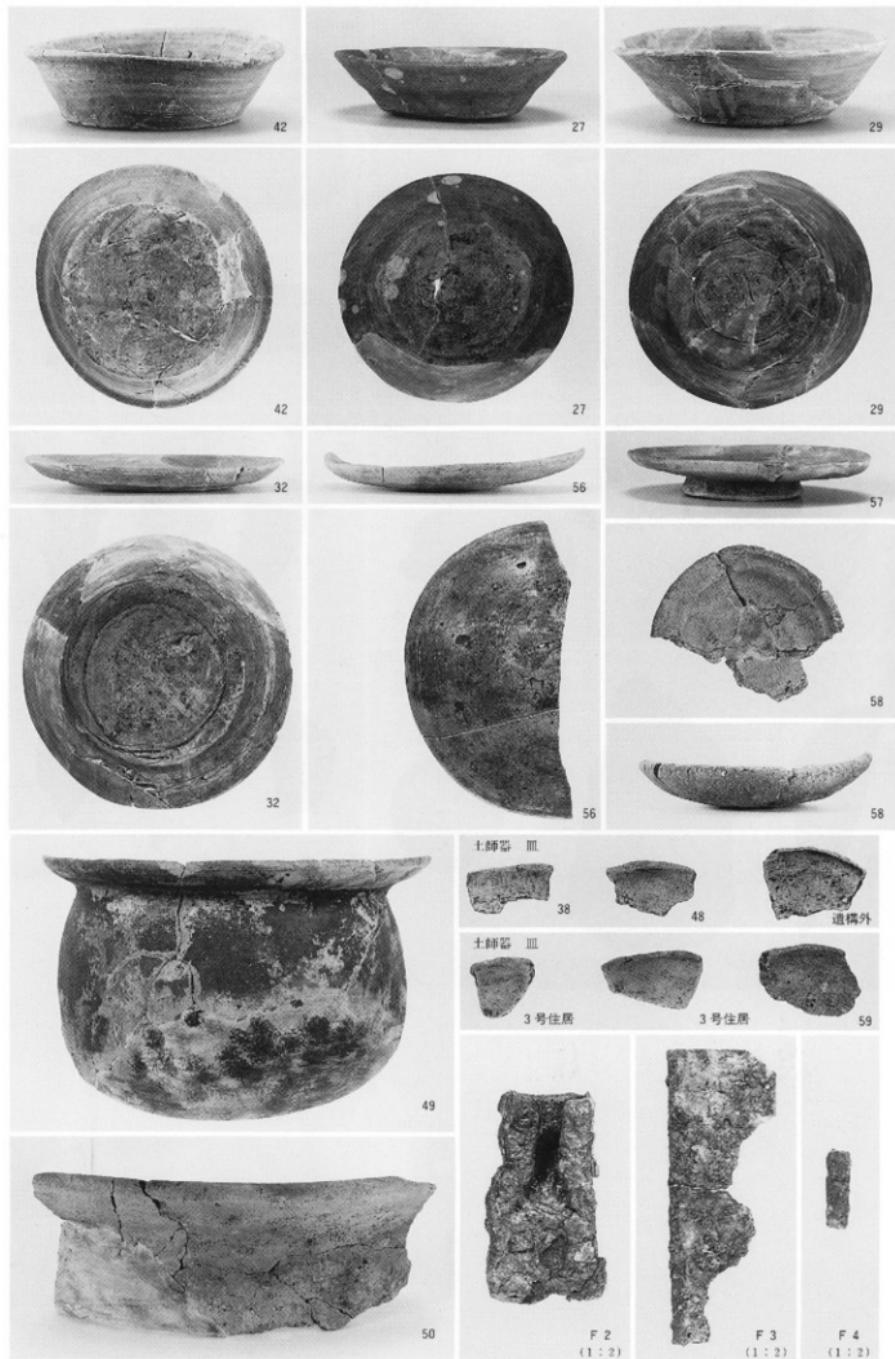


S 1  
(1:2)

S 2  
(1:2)

S 3  
(1:2)





210.2  
Kur  
(95)

図書館

報告書抄録

著者名	向野通跡発掘調査報告書						
副書名	――						
番次	――						
シリーズ名	奈良市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第95集						
編著者名	樋脇賀津子・向野和也						
編集機関	奈良市教育委員会						
所在地	〒682-8611 奈良県奈良市榮町722番地 TEL 0888-22-4419						
発行年月日	西暦1998年3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原図
向野通跡	奈良市大安字16番	31203: 6 TOM	35°25'57"	137°47'1"	19970434~19970624	468	奈良県立奈良古典高等学校女子修学旅行調査実習
所収遺跡名	種別	主な時代:主な遺構	主な遺物			特記事項	
向野通跡	生溝址	近代:瓦窯場遺構	1基	窯跡	埴輪焼瓦の生産に係わる施設。		
		平安:滑板遺構 壁式式住居 柱穴状造構	5基 4棟 2棟	瓦・明治幕・土師器・瓦剣・鉄界・銅津	滑板遺構の大山丸砂層であるホーリ層が熱により変形している。 伯耆国側の大山丸砂層であるホーリ層が熱により変形している。		
		縄文:蓄穴	3基	石斧・投擲・剥片			

---

## 向野遺跡発掘調査報告書

平成10年3月20日 印刷  
平成10年3月20日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 製本 山本印刷株式会社

---